

若者の交際は不活発になったのか

——出生動向基本調査の集積データから推移確率を推定する——

東京工業大学 毛塚和宏

1 目的

2000年後半から「草食男子」という言葉が流行し、「若年男性の交際や結婚が昔に比べて不活性化している」（以下、草食化言説）という共通認識が社会の中で広がってきた。しかし、この草食化言説が直接検討されたことはあまりない。草食化言説を検証するためには、交際状況の動的な把握、具体的には、パネルデータによるイベントヒストリー分析が必要である。しかし、ここ40年間の交際状況を見通すようなパネルデータは現時点で存在しない。

本研究では、別のアプローチによって1980年代から2010年代までの交際状況の活発さを検討する。

2 方法

本研究では、第1節で指摘した問題を克服するために推移確率を集積データから推定する方法を採用する。データは国立社会保障・人口問題研究所の出生動向基本調査である。特に、第15回調査の報告書の「図表I-2-3 調査・年齢別にみたパートナーシップ構成」（国立社会保障・人口問題研究所 2017: 23）を用いる。この図表には第9回調査から第15回調査までの、有配偶・離死別を含めた異性との交際状況の比率が示されている。出生動向基本調査は一部を除いて5年ごとに行われているために、たとえば第9回調査（1987年）で20～24歳のサンプルと第10回調査（1992年）で25～29歳のサンプルは、同じ出生コーホートに属している。

この性質を用いて、推移確率を推定する。たとえば20～24歳男性が「交際している異性はいない」という状況から5年後に「恋人として交際している」という状況へと推移する確率を推定する。本研究では特に、20～24歳と25～29歳を始点として、「交際している異性はいない（以下、いない）」「恋人として交際している異性がいる（以下、恋人）」から他の状況への推移確率を推定する。推定はMacRae(1977)に即して制限付き最小二乗法を用いる。また、データの特性上、一部の推移確率は0に固定されている。

3 結果

現時点の暫定的な結果を示す。・「いない」からの推移:どの年代でも「いない→いない」は上昇傾向である。一方、「いない→有配偶」への確率はU字カーブを描く傾向が確認できる。・「恋人」からの推移:20～24歳の「恋人→いない」は上昇傾向である。「恋人→有配偶」はおおむね減少傾向である。

4 結論

交際相手する異性がない状態からの推移をみると、一概に草食化言説が当てはまるとは言い難い。「いない→いない」は確かに増加傾向であるが「いない→有配偶」は近年再び増加しているからである。一方「恋人→有配偶」が減少していることから、一部において結婚から遠のいている（≒草食化言説）と捉えることができるかもしれない。

[参考文献]

社会保障・人口問題研究所, 2017, 『現代日本の結婚と出産:第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書』。